

ISSN 0288-5913

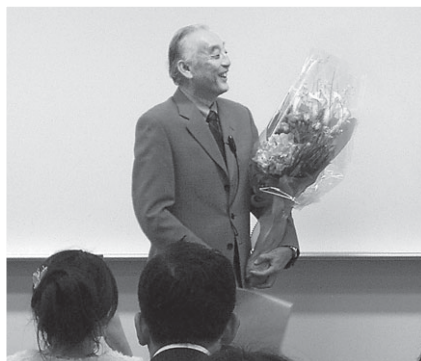
コミュニケーション研究

第 39 号

上智大学コミュニケーション学会



石川 旺 教授最終講義（2009年1月31日）



最終講義風景



最終講義に参加した学生たちと



「囲む会」では「自転車」が贈られました。



音 好宏 教授、藤田高広氏、院卒業生らと



大学院石川ゼミの旧、現役学生らと



2003年7月大学院生交流会にて（立川・昭和公園）

目 次

石川 旺先生への謝辞	音 好宏	1
石川 旺先生の略歴・業績		3
石川 旺教授 最終講義 理論研究における検証と直観	石川 旺	5
英文記事における“nut graph”の役割と意義について	谷川 幹	25
<学位論文審査報告>		
大塚一美「記者の取材源秘匿に関する研究 —アメリカの経験から得た日本のジャーナリズムへの示唆」		49
莫 广瑩「グローバル時代におけるニュース流通の権力構造 —速度論の視点から」		59
<学事資料>		
1 文学部新聞学科		69
2 大学院文学研究科新聞学専攻		76

石川 旺先生への謝辞

新聞学科長 音 好宏

石川旺教授は、本年3月をもちまして、定年を迎えられます。

先生は、1966年に早稲田大学政治経済学部を卒業後、米国に留学し、1968年にミシガン州立大学大学院を修了しました。その後、NHKに入局し、放送文化研究所で研究員（後に主任研究員）として、さまざまな研究プロジェクトを牽引されました。1992年に上智大学文学部新聞学科に教授としておいでいただき、今日に至っております。

石川先生は、学科では、「コミュニケーション論」「放送論」「コミュニケーションと技術」など、また、大学院では「コミュニケーション論特殊講義」「放送論特殊講義」「コミュニケーション論特殊研究」をはじめとした科目を担当されながら、数多くの学部生、大学院生を育成されてきました。その間、大学院新聞学専攻主任、新聞学科長など、学内の要職を務められ、上智大学、並びに、新聞学科の発展に、ご尽力くださいました。特に大学院新聞学専攻主任の職には3期にわたって務められ、大学院生の教育環境の整備、増加するアジア諸国からの留学生の指導体制の整備に、力を注がれました。

石川先生のご専門は、社会心理学をベースとしたコミュニケーション理論ですが、その理論研究に依拠しながら、社会とメディアとの関わりについて、批判的検証を続けられてきました。そのようなお仕事の一つがNHK放送文化研究所時代に始められた「放送の質」研究です。その成果は、Quality Assessment of Television (University of Luton Press 1996)としてまとめられ、海外でも高く評価されています。その後、メディアの論調と世論との連動性を「パロティング」というキーワードで考察し、注目を集めるなど、常に斬新な問題提起を続けられました。

石川先生は、ダンディ、かつ、気さくなお人柄から、国内外の研究者、若手研究者との交流も活発になさり、数多くの研究者を育てられてきました。

石川先生の新聞学科に対する長年にわたるご貢献に心から感謝いたしますとともに、先生の今後のますますのご活躍をお祈り申し上げます。

石川 旺教授略歴

- 1966年3月 早稲田大学 第一政治経済学部経済学科卒業
1968年10月 ミシガン州立大学大学院Department of Communication修了
2000年3月 上智大学大学院文学研究科新聞学博士号取得（論文博士）
1970年4月1日～1987年6月30日 NHK放送文化研究所研究員
1987年7月1日～1992年3月31日 NHK放送文化研究所主任研究員
1992年4月1日～2009年3月31日 上智大学文学部新聞学科教授
1993年4月1日～1997年3月31日 上智大学大学院文学研究科新聞学専攻主任
1994年4月1日～1996年3月31日 図書館委員会委員
1999年4月1日～2002年3月31日 教職課程委員会委員
1999年7月1日～2000年3月31日 財団法人大学基準協会判定委員会情報学系専門審査分科会委員
2000年4月1日～2002年3月31日 上智大学文学部新聞学科長
2002年10月1日～2004年9月31日 大学評議会評議員
2002年4月1日～2003年3月31日 図書館委員会委員
2003年4月1日～2004年3月31日 上智大学大学院文学研究科新聞学専攻主任
2009年4月1日～ 上智大学文学部新聞学科特別契約教授

主な研究業績

(1990年以降)

【著書】

- Quality Assessment of Television Univetsity of Luton Press 1996年
『スポーツ文化の現在』（共著）道和書院 2000年
『市民社会とメディア』（共著）リベルタ出版 2000年
『放送評価の枠組みにおける制度評価－評価軸としての地域多元性の検討』
湘南ジャーナル社 2000年
『パロティングが招く危機』リベルタ出版 2004年

【論文】

Media Generated Minorities : The Role of Japanese Mass Media in Pollution Disasters, Studies of Broadcasting NHK, 1990

The Role and Function of Public Service Broadcasting in a Multi-Channel Media Environment JAVNOST/The Public, 1996

「世論調査に関する最近の疑問点」『コミュニケーション研究』30号 2000年

「メディア論調の形成—2002W杯サッカー大会の事例分析」『コミュニケーション研究』33号 2003年

Development of IT Infrastructure: Japanese Perspective A Paper Presented to the International Conference Hosted by the Vietnam Ministry of Culture, 2004

Mobile Technology: Lights and Shadows A Paper Presented to the International Conference Hosted by Sung Kyun Kwan University, Seoul, 2004

「親子再会の記事・映像が肯定的評価につながった」『論座』2004年8月号
朝日新聞社

Independence: A Principle to Be Achieved 'Over Time' Autonomy, Accountability and Assessment of Public Service Broadcast Journalism, Korean Society for Journalism and Communication Studies, Seoul, 2005

「世論調査に表れた『意見』の検討」『朝日総研レポート AIR21』2005年5月号
朝日新聞社

Individual's Attitude, Opinion and Public Opinion Survey Social Changes and Public Communication in East Asian Countries, 2005

Pragmatism Among Japanese Journalists Today International Conference on Rethinking the News Media and Journalism Education in the 21st Century, 2006

Journalism and the Extreme Right-Wing Movements in Japan Global Issue, Media & Culture in the 21st Century; Institute of Media Culture Contents, Sungkyunkwan University, 2007

最終講義

理論研究における検証と直観

石川 旺

理論研究の初心の頃

こんなにたくさんお集まり頂いてありがとうございます。実は、ここ一、二週間の間にいろいろなことが起きて、来年もう1年新聞学科のお手伝いをさせていただくことになりました。けれども、65歳定年というのはそれなりに意味のあることだと私は思っております。研究対象としておりますメディアという領域は、現在非常に速いスピードで状況が動いております。そのような状況について分析したり考察を加えるのはやはり若い人がやるべきことではないか、私たちはそろそろもっと若い方に場所を譲るべきではないかという考えもありまして、65歳定年で私は退職させて頂こうと思っておりました。ただ、学科の中の状況が変わったものですから、私でお役に立つのならばお手伝いいたしましょうということになりました。そんな事情はありますけれども、自分自身ではやはりこれが一つの区切りと思っております。今日この場でこういう形でお話しさせていただく機会を得ましたので、私なりにこんなことをやってきたというようなことを述べさせていただければと思います。タイトルは「理論研究における検証と直観」と大げさで、理論研究をやっている方々は何をいったい話すのだということを恐らくお考えだろうと思います。私自身はこんなふうを考えてやってきたということをお話しさせていただきますので、マス・コミュニケーション研究に余りなじみのないお方には、前半は少し堅苦しくなるかもしれませんが、お許しいただければと思います。

私自身は60年代からこういう分野に関心を持ち、大学院生活を経まして70年代に入るあたりから研究生活に入ってきました。その時期、つまり研究生活に入りました初期に大きな影響を受けた方がおられます。私がNHKの放送文化研究所というところに入りましたときに、後に早稲田大学の教授になられましたけれども、岩下先生という方が主任研究員でおられました。私は

石川 旺

その方に手取り足取り研究方法というものについて教えて頂きましたが、そのときに大変新鮮であったのは、理論研究というものは、それまでに既成のものとして本に書かれていたり論じられている理論を勉強しているだけでは何にもならないという教えでした。その理論というものについて自分なりに検証し、自分なりにきちんと咀嚼しなければ何の意味もないというようなことを先生は私におっしゃったわけです。

そのころよく使われたものにセマンティック・ディファレンシャル、SD法というものがございました。これは細かく説明しますと長くなるので省略しますが、当時は何かといいますと皆SD法、SD法と言って、それを使ったものです。それにつきまして岩下先生は、あの理論は嘘であると言われました。世の中で広く使われているものを嘘と断じ、こんな理論が成立するわけがないとよくお話しになっておられました。その間の論考の経緯というのを聞かせていただいて私は非常に納得し、なるほどそういうものかなと思いました。そのあたりから、単に過去にどこかの本に書かれていたとか、あるいは誰か有名な理論家が言っていたということだけを学び、自分の頭の中でそれらを羅列していくだけでは何もならないのではないかということ、非常に強く意識するようになりました。

「二段の流れ」仮説の再検討

そういうようにいろいろ考えてみますと、きょうは2つばかり例を取り上げさせていただきますが、現在の日本のコミュニケーションの理論の中で広く受け入れられている仮説の中にも、少しおかしいのではないかと思うところがあります。最初の例は「コミュニケーションの二段の流れ」という仮説です。

この仮説は1940年のアメリカの大統領選挙の時に行われた調査から導かれたものですが、キャンペーンの期間中、人々は何の時点で投票する候補を決断するのか、そしてその決断にマス・メディアはどのようにかわるのかを検証しようとした研究でした。

その研究の結果、何が大きくクローズアップされたかと言いますと、人々は投票の意図を決定するときに、マス・メディアから直接影響を受けているのではない。そうではなくて、マス・メディアにより多く接触したオピニオン・リーダーという人々が居り、一般の人々はその人たちとの個人的な接触

を通して意見や態度を変えていくのである、という仮説でした。これは当時としては非常にセンセーショナルな仮説でありました。

マス・コミュニケーションの研究は1930年代あたりから盛んになりましたが、そのベースになったのは第一次世界大戦におけるプロパガンダの研究でした。戦争中の宣伝ですので、そのころ考えられていたメディアの効果というのは、マス・メディアが直接個人に働きかけ、個人の意見や態度に影響を及ぼすというものでした。これがマス・コミュニケーションに関する基本的な考え方であったわけです。それに対しまして、この「二段の流れ」という仮説は、そうではない、途中にオピニオン・リーダーというものが介在して、影響の流れというのは二段階なのであるということ提起したわけです。これは当時としては極めてセンセーショナルな仮説でした。非常な注目を浴び、この仮説の再検証、再々検証をしようとして多くの人がさまざまな研究をしました。この前後、「二段の流れ」の仮説に関する研究論文というのは非常に多く公表されています。

この仮説、つまりメディアからの影響はオピニオン・リーダーを通じてフォロワーに流れるという仮説は、何となくそのまま受け入れられてしまったのですけれども、よくこの研究報告を読んでみますと、その研究の要約といましようか、研究のポイントのアピールといましようか、それはどうも余り適切でないのではないかと、ある一点に偏ってはいなかったらどうかということを私は思うわけです。

この研究報告を実際に詳細に眺めてみますと、大統領選挙のキャンペーンの期間中、約半数の人は、最初からもう投票する候補者、投票する政党は決まっていました。また、約4割近くの方は当初は態度未決定であり、選挙キャンペーン期間中に決めました。実際にそのオピニオン・リーダーとおぼしき人々と意見の交換をして、そのことによって投票の意図を変更した人は全体の8%に過ぎなかったわけです。そこで、この研究成果を総括して公平に見ようとした場合、もっとも公平な見方というのは人々はマス・メディアと関係なく、全体の半分ぐらいの人々は最初から投票する相手は決まっている。それから、4割近くの人々は途中からある流れに乗って投票の意図を決めていくのだ、というようなことが見えて来ます。そうしますと、この研究成果というのは、実は現在の日本の投票状況などに当てはめてみても、なかなかの説得力を持っているのではないかとすると、なぜこの二段の流れとい

石川 旺

う、オピニオン・リーダーとフォロワーとの関係部分だけが、非常に強調されて我々の間に伝わってきているのだろうかということを考えます。現実にはキャンペーン期間中に投票意図を変える人はほんの一握りなのであり、その一握りについてみれば確かにマス・メディアの直接的な影響よりもオピニオン・リーダーの影響が強い。でもそれは社会全体としてみた場合、一部に過ぎないのに強調されてきています。

このように考えてみますと、この研究がアピールされてきたプロセスや背景というものが何となく頭の中に浮かんでまいります。一つは、この研究の大きな特色ですが、社会調査、つまり実際にフィールドに出て行ってデータを集めて研究をするという方法は当時の研究としては大変斬新でありました。このように統計学的な手法を使ってデータをまとめていくというやり方が実際に研究方法として確立してきたのは、1930年代から40年代にかけてです。この新しい方法を用いた研究、斬新な研究方法を用いた研究として1940年の大統領選挙の研究は位置づけられています。方法論として非常に新しいものであったということが、一つのポイントです。

それから二つ目には、この研究を通じ、社会全体としては投票意図というのは余り大きく揺れ動かないものであるけれども、その揺れ動いた部分についての目を引く発見を強調し、アピールしようという研究の主体者の意図があったのではないかということを私は考えます。この研究の中核を担った人たちは、ナチス・ドイツに追われてアメリカに亡命してきた学者たちでした。この前後のアメリカの研究状況というのは、これは社会科学の分野に限りませんが、ナチス・ドイツに追われてアメリカにきた人たちが、さまざまな分野でさまざまな貢献をいたしました。貢献をしたというようにも考えられますが、一方ではやはり自分たちの存在を非常に強くアピールしようとしたということもあると思います。

例えば心理学の分野で申しますと、クルト・レヴィンという学者が居ります。この人はヨーロッパでは著名な学者でしたが、ナチスに追われてアメリカに亡命してきますと、アメリカではヨーロッパで自分が得ていたと同じぐらいの地位を確立するのは簡単ではありません。当時のアメリカの心理学と申しますと、行動主義の全盛時代であり、その中に入ってしまったとしても注目を得ることは困難なのは目に見えています。そこでなんとか自分をアピールするために、新しい理論を提唱するということになります。グループ・ダ

イナミクスという小集団研究をレヴィンが提唱した背景はそういうものであったのでしょうか。自然科学の分野ではナチスに追われてアメリカにきた物理学者たちが新しい研究で自分たちをアピールしようとし、原子爆弾の開発に至ったことはよく知られています。

社会科学の分野、マス・コミュニケーション研究の分野でも、亡命科学者が新しい方法を使って新しい研究を展開し、自分たちの地位を確立していこうという動機があったのではなかろうか。そういう背景があって研究データの一部に過ぎない二段の流れという部分がセンセーショナルな部分、非常にアピールする部分として強調されて後の世に伝わってきたのではないかと考えます。

それが広く受け入れられるためにはもう一つ要素があったのではないかと思います。この仮説が意味するものはアメリカ人にとって、あるいはアメリカ社会にとって、多分極めて快いものであったのではなかろうか。1940年代ですから、当時のヨーロッパではナチス・ドイツが問題状況をつくり出しております。アメリカ人の目からはナチス統治下のドイツはプロパガンダによって国民がすべて一方向を向いていると見えたのではないのでしょうか。それに対してこの研究はアメリカは違うと述べております。オピニオン・リーダーという人がいて、その人たちの周りで皆が討論をして、その結果として選挙の投票の態度、意見を決めているのであると。この理論はアメリカ人にとりましては、アメリカは民主主義の国であるということを実感させる、非常に快いものでもあったのだらうと推察されます。

研究した人間たちがアピールしたいと思ったポイント、それを受け入れる人たちが快いと思ったポイント、それらが一致しますと、研究の結果について、全体の状況よりも一部が強調されて伝わるということが出てくるのではないかと私は思います。

「沈黙の螺旋」仮説の再検討

もう一つの例ですが、これもマス・コミュニケーション研究の分野では有名な「沈黙の螺旋」という仮説があります。これは1973年にドイツのエリザベート・ノエレ・ノイマンという人が発表しましたが、この仮説の背景は1965年のドイツの連邦議会選挙でした。このときの選挙ではキリスト教民主同盟／キリスト教社会同盟と、ドイツ社会民主党の間で、非常に接

戦が予想されていました。ところが、蓋を開けてみるとCDU/CSUの圧勝に終わりました。この間の現象を分析してみると、選挙の直前の時点で世論の中にある種の雪崩現象が起きていたということがわかりました。

それにヒントを得まして、ノエレ・ノイマンは「沈黙の螺旋」という仮説を発表いたしました。その仮説の前提では、人々は意見の分布や世論の動きについて、直観的に全体の状況を見きわめるある種の準統計学的なセンス、感覚を持っているとしています。そしてその上で、自分がそうした世論過程の中で孤立することを人々は恐れるのであると仮説は論じています。孤立すると世論というのは孤立した人に対する制裁力を持つのではなかろうかとノエレ・ノイマンは述べました。その結果、多数意見に属する人はどんどん自分の意見を公表するけれども、少数意見に属する人は次第に沈黙して行く。これが「沈黙の螺旋」と名づけられたプロセスです。そのように片方は声高になって行き、片方は沈黙して行くという2つのプロセスの間で世の中の意見の差は実際よりも拡大していくのではないか。それが雪崩現象に至るのではないかという分析でした。

これは、やはり当時としては非常にセンセーショナルな仮説でした。どういう意味でセンセーショナルであったかと言いますと、先ほどご紹介しましたコミュニケーションの「二段の流れ」の仮説が世の中に広めた理解は、マス・メディアというのは直接人々に大きな効果を及ぼすことはない。むしろマス・メディアの効果というのは、オピニオン・リーダーを介させた間接的な効果であり、直接的な効果はそれほど大きくないというものでした。それに対して「沈黙の螺旋」の仮説というのは、マス・メディアは直接的に大きな影響力を持つという問題の出し方をしたわけです。

そもそも彼女が最初に発表した論文のタイトルは、“Return to the Concept of Powerful Mass Media” というもので、これ自体がもう既に当時の学問の状況としては挑戦的な表現を含んでおります。けれども73年のこの論文が非常に注目されてから以降のノエレ・ノイマンが何をやったかと言いますと、この仮説を発展させまして、1980年に1冊の本を書きました。そこまでの発展過程で彼女がどこに力点を置いたかと言いますと、少数意見に属する人は黙るというところを更に追求したわけです。当初の研究は、非常に興味深い論点を含んでいたと私は思います。つまり世論というのは雪崩現象を起こすものであるということ。それから、ある方向性が生まれると、勝ち

馬に乗るといふ形で、多くの人々の意見や態度が大きく揺れ動くといふことの指摘です。

この研究の中で示されたデータは私たちに非常に大きな示唆を与えています。例えば、前回の郵政選挙と言われた小泉首相主導のものと衆議院選挙で、一部に雪崩現象が起きていたのではないかという指摘があります。全体ではありませんけれども、ある年代層で雪崩現象が起きていたといふことは、朝日新聞社の世論調査のデータに現れていると聞いております。そういうことを考えてみますと、この当初の選挙結果の研究は、今日にもつながる非常に興味深いデータを提供していたと私は思います。けれども著者はその強調はあまり行わず、むしろ少数派は黙るといふことに力点を置いて以後の論を展開いたしました。

これはどうしてだろうといふことを考えて見ますと、先ほどの「二段の流れ」の仮説の場合と同様に、既存の研究との差別化が非常に強く意識されていたのではなからうか、あるいは、そういうことを通じての研究者自身の自己アピールといふものが強く反映されていたのではないかといふようなことが頭に浮かびます。さらに、先ほどはアメリカの風土の中で「二段の流れ」の仮説といふのは非常に快かったのではないかと述べましたけれど、「沈黙の螺旋」も当時の西ドイツの風土の中では人々にとって快い仮説であったのではなからうかと思ひます。つまり、まだナチス時代の体験が色濃く残っていた時代の中で、なぜ流れをとどめ得なかったのかの理由付けとして、自分たちは反対であったのだけれど、少数派であると認識したがために沈黙したのであるといふことが理論付けられる仮説であったわけです。自分自身は心ある存在であり、状況に否定的であったのだけれど、少数派としては声を上げることができなかつたことを説明し得る仮説であったのではないのでしょうか。そう考えてみると、なぜ沈黙といふところにノエ・ノイマンが集中していったのかも何となくわかるような気がいたします。

けれども、先ほど申しましたようなアメリカの研究の例、つまり、あの仮説はアメリカ人にとって快かったのではないかとか、あるいは研究者自身をアピールしたかたのではなからうかといふこと、さらにはこのドイツの「沈黙の螺旋」の仮説につきましても、研究者自身のアピールが意図されていたのではなからうかとか、あるいはドイツ人にとって快い仮説であったのではなからうかといふあたりはすべて推測の域を出ません。

石川 旺

従いまして、こういう推測につきましては例えば授業の段階では私は言いません。ただゼミナールでの議論などになりますと、こういうこともあるのではないかと、こういうことも考えられるのではないかとというようなことを言って参りました。実はこういうことを考えていくのが理論研究を進めて行く上で一番肉づけになる部分であり、重要な部分です。そういうところから理論研究というのは膨らんでいくのではないかとというようなことを私は考えて来ました。

この2つの例でお話ししましたけれども、やはり世の中の人々にとって快い仮説というのはだんだん広がっていくのかなという気もいたします。私自身で申しますと、5年ほど前に一つ調査をやりまして、その結果をゼミ生の協力などもあって一冊の本にまとめました。この本の内容は、当時の小泉首相の靖国参拝や自衛隊のイラク派遣などについて世論調査を行い、その結果と購読している新聞の記事論調との関係を分析しました。結論として書いたのはどうも日本の新聞の争点にかかわる報道は、余りバランスがよくない。一方で受け手は購読している新聞の論調にそのまま同調していて自分なりの意見をきちんと形成していないのではないかとということでした。これはメディア関係者にとりましても、一般の人にとりましても快いわけではない結論でありまして、こんな研究で世の中にアピールすることができるわけはありません。けれども、そういう心意気を感じて本にしてくれる出版社の社長さんがおられまして、感謝している次第です。

直観からの組み立て—マンガの氾濫が知性の衰退を招いている？

ただいまは余談ですが、そんな具合で理論研究というものに対してさまざまな形で取り組んでいきますと、先ほど申しましたように推測の域を出ないけれども、そのあたりの周辺でいろいろ組み立ててみるということをししば試みることになります。そのきっかけは何かと申しますと、既存の理論や研究について、自分がいろいろ読んだり考えたりして行く中で、何か「あれっ」と思うようなことがあり、それが手がかりになって次の段階の考察や分析に繋がっていくことになるのだらうと思います。その「あれっ」というところが、恐らく「直観」という部分なのだらうと思います。その直観を得たところで、その直観に基づいてさまざまな思考を自分なりに組み立てるといったようなことが理論研究の中では必要になってくるのだらうと思います。

これはまだ全くの直観の段階ですけれども、私が最近考えたことを一つお話しさせていただき、皆さんにもいろいろお考え頂ければと思います。

最近よく言われることですけれども、知的なるもの、知性といったものが社会的に見てどんどん衰退しているのではなかろうかという指摘があります。評判になったところでは、立花隆という評論家が「東大生はバカになったか」という本を書きました。最近でも「知の衰退」といったような表現がタイトルに入った本をしばしば見かけます。そういうように思わせる社会現象というのが現在あることは確かです。

例えば政治家でいいますと、首相たる者が日本というのは神の国だと発言したような例があります。小泉首相という人は、実は論理的には支離滅裂なことを言った人で、この人は知性、知的なるものという観点からするとどういふ人なのかと私は何度も疑問を抱きました。一つの例ですけれども、イラク侵攻の理由とされたのは、大量破壊兵器の存在でした。実は存在しなかったと報告されていますが、日本の国会で追及された時の首相の答弁は、確かに調査の結果大量破壊兵器は発見されなかったが、フセインの搜索をしてフセインが見つからなかったからといって、フセインが居なかったということにはならいだろうという意味のものでした。言葉どおりではありませんがこういう意味のことを言いました。フセイン大統領は存在がそれ以前の段階で確認されていました。その人を搜索して見つからなかったら、搜索が失敗だったわけです。大量破壊兵器については存在が確認されていませんでした。それに対して搜索が行われた場合に、答えは搜索が失敗したのか、そもそも存在しなかったかのどちらかです。大量破壊兵器に関しては綿密な搜索を完了したわけです。その追求は十分行われた。だから、論理的な帰結として大量破壊兵器は存在しなかったことに現在なっております。小泉首相の答弁は全く論理性を欠いていましたが、そのようには誰も指摘しなかったし、メディアもはっきりとは指摘していなかったと思います。私が見た限りの記事ではありませんでした。

そんな例もありましたし、閣僚の言動などでも、女性というのは子供を産む機械というようなことを言ってしまった大臣が居りました。こういう言動の知的水準というのは一体どうなのかと思わせるような事例は幾つもあります。それからジャーナリストも最近では批判されている部分がありますし、学者ということになりますとさらに疑問符がつきます。日常風景で見ると、電

石川 旺

車の中で多くの人が漫画を読んでいたりと、納豆ダイエットで懲りたと思うのにまたバナナダイエットに狂奔したり、血液型で性格はわからないといくら学者が指摘しても聞き入れないというように、挙げていけばきりがありません。

特に私は漫画の氾濫というのが頭の中にありまして、こういうことでいいのかなと思っていました。そこに漫画が好きで漢字が読めないという首相が出てきて、ここで私の頭の中で一気にいろいろなものが結びつきました。知的なるものの衰退というのは、これは絶対漫画のせいであるという直観が生まれたわけです。

これはこの段階では単なる直観です。そこで直観を得たときにどうするかと言いますと、知的なるものと漫画との対立関係を詰めて考えていくことをするわけです。そのときに、例えば漫画が好きな人がすべて知的ではないと言い切れるかという疑問は当然出て来ます。確かにそうは言い切れません。けれども、そうとは言い切れないのではないかという留保条件をすべて無視するのが一つの方法です。そんなのはほうっておけば良い。漫画と知的な衰退というのは絶対に結びついているのだと断定をし、そこからさまざまな展開を試みる。そのあたりからいろいろな思考が生まれてきます。この場合だと漫画と対立するのは何かという問題になります。そこから、では文字とは何かということになります。

文字と漫画との対立ということになりますと、皆さんの頭の中でもどんどんさまざまな連想、直観が出てくるだろうと思います。仮にですが、漫画雑誌の1ページを広げたのと本を1ページ広げたのを比べ、広げた見開きページの中にある情報量というのがどれぐらいだろうかということを考えてみます。すると、漫画の情報量というのはこの見開き2ページで見える中で言えば非常に貧しいのではなかろうかということに思い至ります。これもいろいろ反論はあり得るだろうと思うのですが、そういう反論は無視して次へ進むわけです。

漫画の情報量と本の情報量ということ考えたときに、次に私の頭に浮かんだのは、視聴覚映像の情報量と文字の情報量はどういう関係なのだろうという問題でした。そのときに、私の中に残っていた非常に印象的であった体験が蘇ってきました。もう昔々のことですが私がまだ中学生ぐらいのときに「エデンの東」という映画がありました。この映画にジェームス・ディーン

という当時世界中のアイドルになったと言ってもいいぐらいの俳優が主演しております、映画としては当時記録的な大ヒットとなりました。それぐらいの映画ですから私もまだ中学生ぐらいだったと思いますがとにかく見た覚えがあります。それから何年か経って「エデンの東」の原作を読みました。そこで非常に驚いたことに、映画は原作のごく一部だけしか取り上げていなかったのです。つまり「エデンの東」の原作のストーリーを全部映画にしたならば、膨大な長さになってしまうということをそこで理解いたしました。そこから映像の情報量、視聴覚から入ってくる情報量と、文字から入ってくる情報量というのは全然違うということに考えがいきます。単位時間当たりの情報インプットということから考えますと、文字というのはやはり大量の情報が入ってくる。それに比べて、映像はそれほど多くの情報が入ってこないのではないかということを思います。そのところで問題になるのは、情報の密度の問題なのでしょう。そう考えて行きますと文字の機能というものをさまざまな角度から検討しなければなりません。

日本の場合で見ますと、ある時代までは文字を持っていませんでした。文字が無かった時代と文字が入ってきてからの時代の間は何が起きたらうかということを考えてみなければならぬと思います。

そこで関連する資料をあたって見ますと、たとえばある学者は文字の無い社会、つまり無文字の社会と文字のある社会というのを分けて考えてはいけなないと主張しています。そこには連続性があるという議論で、そういう論からは文字を持つことによって、むしろ人間の記憶力というのは減退したという展開になります。無文字の時代にはすべて記憶していたのに文字に情報を移しかえることによって、記憶するという点に関して人間はなまけ始めたという理解です。したがって、文字が無い社会から文字のある社会に移ったことが、必ずしも進歩や発達を意味するのではないと論じられています。

となると、これをまず論破しなければならないわけです。その論破の道筋として、一つは、文字というのは記憶のツールとしての機能は確かにあり得るし、記憶を自分の頭の中に把持するのではなくて、外に記録しておくためのツールとすれば確かにそういう議論があり得るかもしれない。しかし、メモリーへのインプットのためのツールとして考えた場合に、文字は非常に豊かな情報量を持っているのではなかろうかということ 생각합니다。

現実に文明の発達を見ますと、四大文明の発展はすべて文字というものを

同時に持ちながら進行しております。メソポタミアの楔形文字、エジプトのヒエログリフ、インドのインダス文字、中国の甲骨文字などがそれぞれ紀元前何千年というあたりで登場しております。こういうように文字というものが、文化・文明の発達に非常に大きくかかわっていたということは間違いないことだと思います。

けれども、そういう事実に関しまして、先ほど申しました無文字の時代と文字の時代と区別してはいけないという論者は異論を唱えます。日本の例で言えば文字文化が完全に定着した時代に、例えば「平家物語」という琵琶法師が口承するものが生まれている。あるいはヨーロッパで言えば口承の英雄叙事詩「ニーベルンゲン」の例もある。文字時代を文化的優越とするならばこれらをどう説明するのかというような論を唱えます。

こういう学者の説は、これもまた論破しなければならない。私のいささか乱暴な直観を展開していく上では、こういうのは全部乗り越えて踏みつぶしていくということになります。では例えば「平家物語」は、なぜ文字文化がそれだけ定着していた中で琵琶法師が語るものとして残ってきたのだろうかという話になります。このあたりで私が思いましたのは、これはやはりある種の芸能、パフォーマンスに近かったのではないかということでした。どうしてそう思ったかと言いますと、ここでも昔の記憶が関わってきます。私たちが中学生ぐらいのころは、学校教育の中でよくいろいろなものを暗誦させられました。国語の教科書を暗誦させられたり、英語の教科書を暗誦させられたりまして、暗誦というものが教育の中で大きな部分を占めていました。そんな体験をしてきた中で、ある時期に私は「平家物語」に興味を引かれて読んだ時に印象的な一部分をちょっと暗誦してみようという気を起こしました。そのときに鮮烈な印象があったのですが、国語の教科書や英語の教科書の暗誦というのは全くつまらなかったのです。こんなものは覚えて何になるのかと不満を抱きながら暗誦させられました。ところが平家物語の暗誦を試みまして、これが暗誦していて実に楽しかったのです。

一例ですが、源氏と平家の屋島の戦いで、那須与一の「扇的的」という話がございます。源氏と平家の戦いで陸に源氏の軍勢がおりまして、海側に船に乗って平家の軍勢がおります。その平家の船が一艘、少し漕ぎ寄せてきて、船端に竿を立て、その上に真っ赤な扇を結びつけて、これを弓で射てみよと挑発をいたしました。源氏の側は那須与一という弓の名手を選ばれ、馬を若

干波打ち際から乗り入れまして、鏑矢をつがえます。鏑矢というのは先が二股になった矢で、二股の根元に空洞の丸いものがついています。この空洞に穴が開いていまして、矢を射るとブーンという大きな音を立てて飛びます。これは戦いを始めるときに射る矢で、これは実は的を射るにはこういう形の矢ですから精度が悪いものです。ただ、扇を狙うということで二股の利を考えて与一はこの矢を使ったのかなと私は思うのですが、そのところの描写は「与一、鏑を取ってつがい、よっぴいてひょうと放つ」。普通、文字で書きますと「よっぴいて」という書き方はいたしません。「ひょうと放つ」という書き方もしないでしょ。けれども、これはパフォーマンスですから聞く場合の音として非常に美しくでき上がっております。

「与一、鏑を取ってつがい、よっぴいてひょうと放つ。小兵という条十二束三伏、弓は強し。鏑は浦響くほどに長鳴りしてあやまたず、扇の要ぎわ一寸ばかりおいて、ひいふつとぞ射切ったる。鏑は海へと入りければ扇は空へと上がりける。春風に一もみ二もみもまれて海へさつとぞ散ったりける。みな紅の扇の夕日の輝くに、白波の上に漂い、浮きぬ沈みぬ揺られけるを、沖には平家、船端をたたいて感じたり、陸には源氏、籠をたたいてどよめきけり」となるわけです。

つまりこういう音の美しさでパフォーマンスとしての口承はあるのですが、やはり文字というのはそういうものとは別のものなのだろうと思います。

日本に文字が輸入されたのは大体5世紀から6世紀ごろとされています。漢字が輸入され、前後して仏教が伝来しました。この時代のことを私はいつもとても不思議に思っています。西洋の歴史をずっと見てまいりますと、紀元前399年にソクラテスが亡くなっております。ですから、このころもうギリシャ哲学は相当の水準にまで達しておりました。その後、大体1世紀から2世紀ごろのローマ帝国は五賢帝時代です。マルクス・アウレリウスに代表される哲人皇帝たちが登場しています。

そのころ日本はようやく弥生時代に入ろうかという頃です。吉野ヶ里などで周囲に堀をめぐらせた集落が出来てきたという時期です。5世紀から6世紀ぐらいに漢字の輸入があり、仏教が伝来して、6世紀の末ぐらいから飛鳥時代という時代に入ります。このあたりで日本の国は、わずか100年か200年の間に大飛躍をしているのではないかと私は思うわけです。

例えば500年代の終わりに飛鳥寺という仏教のお寺が初めて建てられます。それから100年ぐらいの間に、例えば法隆寺のような今日まで残るような非常に高いレベルの建築が出てきている。その後700年代になりますと、最澄や空海、つまり伝教大師や弘法大師といった人たちが登場いたします。ここで思想らしいものが形を整えてきます。この間を見ますと、ギリシャ哲学が紀元前300年代ですから、約1000年の差があります。

文化・文明を考えた場合に1000年遅れていたというのは大変な差であっただろうと思います。その差がどこから生まれたかと考えますと、日本という国が辺境にあったということもあるのですが、やはり文字を持っていなかったということが非常に大きな要素ではないかと思います。ただ、おそらくは文字が無くとも、それまでに社会の中ではさまざまに成熟してきているものがあったのでしょう。それが文字が入ってくることによって一気に花開いたのではなかろうかと私は思います。それが短期間の大飛躍の背景ではないでしょうか。

実際にはギリシャの哲学からローマ帝国の時代の哲学まで、当時のヨーロッパでは理性とは何かとか、人間とは何かというような、根本的な問いに取り組んでおりました。つまり抽象概念に対する取り組みが行われていたのだと思います。そういう取り組みはやはり文字を持っていないとなかなかうまくいかない。文字を持つことによって抽象的な概念、例えば理性などというものについて論が深められるわけで、これを文字無しで議論しろと言われるとなかなか難しい。関連する言葉が文字として定着していますと議論が精密になってくるのだらうと思います。

日本では600年代に入りますと遣隋使や遣唐使がさまざまな文明・文化の輸入に関わり、そこで日本の国の制度が整備されてまいります。憲法が出来、官位が定められ、国造制が制定されるという状況が生まれます。こういうことをきちんと定めるのに、文字というのは絶対的に必要なものであります。憲法というのはこうである、あるいは日本の官位はこう定めるというのを、口伝えて代々やっていたのではどうにもきちんとした形に固まらないと思います。

つまり、制度というものを、憲法でも官位でも正確に定義し、時間を超えて保持するのに文字の果たした機能は非常に大きかったと思われます。制度が整備され、受け継がれていくことによって社会全体としてのバランスがと

れて発展していったのだらうと思います。同時に、そういうものが固まってくれば、その基盤になった自然的理念や理論などが固まっていく。制度を固めるためにはどういう理念に基づくのかということはどうしても確定しなければなりません。そのあたりから理念でありますとか思想というものが出て来ます。それが形としてあらわれてきたのが、恐らく最澄とか空海の時代あたりからではなかろうか。これにはもちろん仏教の影響が非常に強いのですけれども、ただ単に仏教の影響ということではなくて、この前後で文字を持ったことによる飛躍があったのではないかなと思います。

そうしますと、文字というのは言語を媒介としたメモリーであると言える。私たちはものを考えるときに言語を用いて考えるわけで、言語は我々の思考を規定しているということがよく言われます。つまり私たちは言葉によって考えるのだけれども、その思考を文字によってメモリーとして残すことが可能になります。こうした形で思考をメモリー化することによって、そこから論理の展開を図ることができるのだと思います。

文字情報を持つということは、そのメモリーの量を飛躍的に増大することです。そこでさらに注目しなければならないのは、我々の頭の中にある記憶と、文字情報として蓄積されているもの、例えば書籍ですが、それとの間にある種の有機的な結合・関連があるということではないかと私は思います。

例えば何か一つの物事について知ろうとするときに、私の頭の中に漠然とした知識、つまり、部分的であったり概略であったりする知識があり、そこからもっと詳しく知りたい場合に、あそこの本を読んでみようとか、あの資料に当たってみようということになるわけです。そうすると、自分の頭の中にあるメモリーと外部にあるメモリーの間にある種の有機的な結合があると考えられます。私は研究室の中にたくさんの本を並べておりますけれども、あの本の内容を全部記憶しているわけではありません。私の頭の中にどの本に大体どんなことが書いてあるかがある程度漠然と入っていて、それによって研究室の中に並べてある本から必要な情報を取り出すことが出来ます。そこでは自分のメモリーと外部メモリーである書籍・資料との間のある種の相互交流みたいなものが行われているのだらうと思います。

知的なるものについては、さまざまな考え方、定義があると思うのですが、知的に考えるということは、自分の頭の中の情報と外部情報を組み合わせる

石川 旺

というプロセスの繰り返しであろうと思うわけです。そういうふうと考えていきますと、先ほどの漫画への批判によくここで帰っていくのですけれども、本を読まない、あるいはこれは新聞学科の学生諸君には新聞を読まないのはいかんと口をすっぱくして繰り返し言っていることなのですが、本を読まないとか、あるいは新聞を読まないというのは、つまり自分の中に入ってくるインプット情報が少ないわけで、自分の中のメモリーが少ないとなると外部にあるさまざまなメモリーとの有機的な結合も図れないということになってくるのではないかと思います。

現代の若い人たちは何かを調べようとすると、すぐにパソコンを使ったキーワードで検索をしまして、ウィキペディアなどから一定の情報を取り出して何となくわかったような気持ちになってしまうということがよく言われております。こういう状況に対して各大学の先生方がだんだん頭にきておりまして、レポートを書くときにはウィキペディアの貼りつけは認めないというようなことを言うわけです。言ってもこれはなかなか実行されないのが実情ですが、そんな具合で本を読まない、漫画ばかり読んでいて、自分の中にインプットされる情報が貧弱になってくる状況というのは非常にまずいのではないかということになります。

なぜそれがいけないのか、なぜ自分の頭の中にメモリーとしてできるだけ多くのものを蓄積しておかなければまずいのかということ考えた場合に、そこで恐らく直観でありますとかヒントでありますとか、そういうものが生まれたところからそこに肉付けをし、展開するプロセスが衰弱することが問題なのだろうと思います。

今ここまで、いろいろなことを申しましたけれども、漫画好きということが知性の衰退に結びつくのではないかといういささか乱暴な仮説を立てたときに、私の頭の中で何が起きたかといいますと、私の頭の中にあるもので関連するものを次々に並べていって見たわけです。

例えば本を読み、そこから情報を得るということを考えた場合、文字の情報量と視覚的な情報をもつ情報量の差についてまず考えました。その時にある記憶がよみがえったわけですが、それは昔見た「エデンの東」という映画とその後に原作の小説を読んだ時に驚いた原作の長さに関する記憶でした。つまり視覚的な情報と文字情報量の差を考えようとした時に昔の一つの記憶がそこに組み合わされたわけです。次に文字が知的な発達を促すのではない

かということを考えた場合に、昔々中学ぐらいで学んだ文字の発達の歴史、四大文明と文字の関係などが頭に浮かびました。あるいは、最澄や空海の時代の日本の社会の発展が頭に浮かび、それらとこれも歴史で学んだことですが、漢字の渡来、仏教の伝来などが結びついてきました。それから、文字を持たないことが必ずしも文化的に低いということではないという論がその例証としてあげた口承、つまり口伝の文学について、「平家物語」には私は別の考えがあり、つまりあれは一種の芸能パフォーマンスであったのではないかということを申し上げました。それは私が昔「平家物語」の暗誦をしたことがあり、その暗誦が教科書の暗誦とはまったく異なっていたという経験から導かれた考えでした。また、ギリシャ時代の哲学者たちがどんな時代に生きたかということと、日本の飛鳥時代との間の時代差みたいなものが頭の中にあいました。千年というのはとてつもない時代差で、それをまたたかだか二・三百年で追上げたということも大変なことだったと思います。

そんな具合に自分のメモリーの中にあるさまざまな情報を組み合わせるによってヒント、直観というものが肉付けされてくるのだろうと思います。先ほども申しましたように、例えば五、六世紀から漢字の渡来があり、渡来工人の指導で飛鳥寺が建ち、さらに唐招提寺が完成して鑑真がそこに移住してというようなことは私の頭の中に漠然とありました。それを今日ここでお話するために、もう一回、資料に当たって確認しました。これが私の頭の中にある、内部の漠然とした記憶と外部のメモリーとの結合です。

そういうように全く分野の異なる「平家物語」と「エデンの東」と、ギリシャの哲学と、飛鳥時代の鑑真和上と、小説「天平の甍」というようなものがすべて重なり合って私の直観にかかわってくる。そうなってきた行き着くところは、どうも漫画を読んでいると知性が衰退するのではないかということになります。

そういうように考えていきますと、自分の頭の中のメモリーへのインプットが貧弱になればこういうように直観から組み立てていくプロセスが崩壊するのではないか。この直観からの組み立ての先に実は本当の意味での「検証」というものが必要なのですが、このままの状況では直観を肉付けして組み立てるといふ能力が衰退し、検証に至る前の段階でストップしてしまうのではないか。自分の頭の中のメモリーというのはやはり相当量持っていないと、さまざまなものを組み合わせた直観、さらにはその直感を肉付けするという

石川 旺

ようなことに到達しないのではないかと思います。

頭の中にキーワードだけがあるというのでは、こういう情報の組み合わせに到達し得ないと思います。あるいはコンピューター上でキーワードを組み合わせると言ってもこういう直観には到達しません。コンピューターに琵琶法師の「平家物語」の暗唱と漫画の話を組み合わせ、そこにマルクス・アウレリウスを持ってきて組み合わせるように命令してもこれは無理なわけです。しかし人間の頭の中ではこういう一種とんでもない飛躍というのがあるわけです。そういうところからさまざまな学問は展開してきたのだらうと思います。直観からスタートしていろいろ組み立てていってみる。そしてその先で本当にそれがそうかという検証をしっかりとやればよいのだらうと思います。

そういう意味で、現在の状況は機械技術がとてども発達してきましたけれども、ものを考えていくプロセスが、これから先どういうように受け継がれていくのかという点で、やや危惧を抱いております。

テクノロジーの発達というのはいろいろ問題がありまして、たとえば携帯電話は個人のコミュニケーション関係にどのような影響を及ぼすのかということがよく言われます。記憶装置を備えた機械技術の発達も、きわめて便利なものではありますけれども、知的なるもの、知性というものに対して何か非常に危ういものを内包しているのではないかと思います。

今日の後半の部分をお聞きいただいておりますが、理論研究とは、自分の持っているあらゆる情報を組み合わせまして、自分に反論するものを論破し、絶対に自分はこう思うというようなことを組み立てていってしまうわけで、これは言ってみれば言葉はちょっと言い過ぎなのでしょうけれども、ある種道楽みたいなものではないかとも思います。私はよく、どうもお前がやっていることは、学問というものの持つまじめさとか苦しきとか、そういうものと無縁なのではないか、少なくとも傍からはそう見える、と言われます。保健体育研究室の先生方は私に向かひまして、あなたは夏場になると私たちよりも日に焼けて色が黒いとおっしゃいます。

どうもこのような具合で頭の中でひねり回していますと、周りからは道楽みたいな研究をやっているのだらうとよく言われます。たしかに普段の生活態度にもそうしたものが表れているのかもしれませんが、でも、私自身は昔か

ら研究というのは楽しいことなのだと思ってやってきました。嫌いでも仕事だからやるというのではなく、楽しいと思うからやってきたわけであります。ずっとこれまで楽しいと思ってやってまいりました。けれども、そのようにずっとやってくることができたということが実はとても幸せなことであったのだと思います。

そういう環境の中に居ることができました。大変すばらしい先輩、同僚たちにも恵まれました。それから勝手なことを言って話をさせてもらえる学生さんたちとも出会うことができました。学生さんたちがよく卒業のときなどに寄せ書きをしてくれるのですが、こんなに普通と違うことを断定的に言う先生は珍しいと書かれたことがあります。でも、そんな具合に過ごしてくることが出来たということ自体が、とても恵まれたことなのだろうと思います。一応無事に定年というところまでたどり着きまして、先輩諸先生、同僚の皆様、それから学生の皆さん、きょうお越しいただいた皆様に、心からお礼を申し上げたいと思います。いろいろありがとうございました。

そして、ご清聴ありがとうございました。

本最終講義は2009年1月31日（土）、上智大学12号館5階502教室で行われた。